

光洋。ピアノは作曲家・伊藤康英だが、この新人テノールは平成23年の「奏楽堂日本歌曲コンクール」第2位入賞。それを機に、聴衆はその柔軟な美声、日本のコトバの明晰さ、そして何より詩と音楽に対しての万全の準備の上に展開されていく彼の歌に驚かされた。

梅原は愛知県立芸大ピアノ科出身で、途中から声楽に転向。びわ湖ホールの声楽アンサンブルの一員として、びわ湖ホールの制作作品をずっと歌ってきた。ピアノの伊藤康英も「奏楽堂歌曲コンクール」で優秀共演者賞の成績の持ち主。この二人が聴かせてくれる「にほんの歌」のやすらぎは、筆舌に尽くし難いほどの「やさしさ」と「生きるちから」を与えてくれる。梅原光洋、今後の活躍と、伊藤康英歌曲との創造に多くのファンが生まれよう。

畑中良輔 ● Ryosuke Hatanaka

平井康三郎を中心とする、新作歌曲を紹介する「詩と音楽の会」も、もう第44回を迎える。2011年9月、津田ホールでのライブである。

平井康三郎亡き後、チェリストの丈一朗がその跡を継いで今日まで、「新しい日本の歌」の創造に新鮮な運動を続けている。主宰者、平井丈一朗の新作をはじめ、その長男でオペラの作曲、指揮で活躍する平井秀明などの新作、またヴェテランの岩河三郎なども相変わらず魅力的な新作を寄せている。

新作歌曲は、特にそれらの初演者の質に左右される。どんなにいい曲でも、「頼まれたから」という理由だけで初演されるようだと、その歌の「いのち」は死んだも同然。聴衆の共感を得ることはできない。初演されるその曲の「いのち」を十全に、初めて聴くものの耳に、心に届かせなくてはなるまい。

この種の音楽会で、未熟なままの歌唱に出会うことがしばしばあった。これらの新曲が初演後多く歌われ、聴かれるために日本の歌を心から愛する人の歌にしてほしいものである。もちろんピアノリストも。この点、今回の演奏者たちの歌曲への誠実さ、アプローチの確固さはつきり読み取れ、聴かれて快い一枚となったのは嬉しいことだった。猪村浩之、川本愛子、竹澤嘉明、小濱妙美らが、手抜きのない歌唱を展開し、生田美子、沼田宏行、三國彰子のサポートを得てのびやかに歌っている。この中から「日本の名歌」が生まれるように。初演で終わらぬように。

神崎一雄 ● Kazuo Kanzaki

【録音評】ごくオーソドックスなライブ・ステージの収録というイメージの録音。今日の多くのライブ・ステージの録音に比べると、もう少し演奏に近づきたい気がする距離感かもしれない。いわばステージというフレームからはみ出すことがないという感じで、歌もピアノも残響もすべてが柔らかく優しい感触で満たされている。2011年8月3日の東京・けやきホールでの収録。〈90〉

され真正面からきびしく聞
ほぐす役割を担い、〈ひと
では逆に忍耐のリズムで聴



■第44回新しい日本の歌(芸術歌曲の夕べ)

〔原裕信：二月／山田茂博：秋の蝶／具志堅清一：小さな青い靴-息子からの便り／井手一敏：月の沙漠-果てなき夢／岡田正昭：帰っておいでトンボ、他(全19曲)〕
〔詳細は巻末新譜一覧表参照〕
平井丈一朗(語り)小濱妙美、鈴木沙喜代、猪村浩之、川本愛子、竹澤嘉明、加形裕子(vo)三國彰子、沼田宏行、生田美子(p)
〔自主制作盤◎ZMM1109~10(2枚組)〕
¥3000

神崎一雄 ● Kazuo Kanzaki

【録音評】拍手入り、MC入りの、紛う方ないライブ収録。シンプルなステージ収録を思わせるサウンドで、そのため演奏を包んでいる音場感(空間情報)はまったく自然で、凹凸感のないスムーズな展開が気持ちいい。またこのホールのクールな響きによって、ややもどかしいオフ気味の距離感を置きながら、演奏はクリアに捉えられている。津田ホールでの2011年9月29日の収録。〈90〉

がおもしろい試みと言える
意識が働いてか、勉強会の
伝わってきて聴き手として